

あいあいの森（緑のドーム） 近々「散髪」をします

園庭の一角にある「あいあいの森」には40数本の樹木が植えられており、外観はこんもりとした緑のドームのようである。夏場の森の中には直射日光が届かず、また風通しがいいからとても涼しい。子どもたちの格好の遊び場となる。

21年前、園舎建設に先駆けて、園庭に森を作ることになった。ねらいは、「紫外線から子どもたちを守る」ためであった。「太陽光線がさんさんと降り注ぐ広場よりも、紫外線を防ぐ日陰が大切」と考えた。森と言っても大きなものは作れない。森を作れば園庭は狭くなる。だが、子どもたちが安心して遊べる森も立派な園庭だ。そう考えた。

伐採免れた数本の樹木を核に

1999年12月、老朽化した市営住宅を解体して保育園用地にする更地化工事が始まろうとしていた。その時、住宅の周囲には、様々な樹木が育っていた。住民が何年も前から育ててきたものだった。市の担当課に尋ねるとこれらの緑もすべて切り倒すとのことだった。「もったいない。温暖化防止のために大きな役割を果たしている樹木を伐採するなんて！」と、担当者に粘り強く交渉する中でやっと、敷地の東南の一角だけが伐採を免れることになった。そこには、くす、えのきなどの樹木が数本、大きく育っていた。この樹木を核にして小さな森を作りたいと考えた。 (ウラ面に続く) ※

「あいあいの森」を作った人 小保方(おぼかた)利治さんからのメッセージ

「あいあい」の初代園長・下村京子は、私の姉です。姉は、群馬県の、みどり豊かで四季折々の花が咲く地で育ちました。

姉は、「日本の四季の美しさを子どもたちに伝えたい。みどり豊かな環境の中で子どもたちを育みたい。多くの花々が咲き、小鳥たちが飛んでくる保育園を作りたい」と考えていました。この思いに共感して、3年計画で仕上げた「あいあいの森」です。この森がいつまでも、子どもたちとともに成長していくことを願っています。
(1945年12月26日生れ・75歳)

※（オモテ面から続く）

園庭全体には400本を超える樹木

その一年半後の2001年3月、園舎建設がほぼ終わるとともに、「あいあいの森」の植樹工事が始まった。初代園長の実弟・小保方利治さんが夫婦で遠方から駆けつけてくれた。

群馬県で造園業を営む弟は、小型重機と苗木を満載したトラックで深夜の高速道路を駆け抜け、開園直前の「あいあい」にやってきた。そして、泊まり込みで植樹作業を進めてくれた。植樹作業は3年間にわたって続けられ、園庭全体では400本を超える各種の樹木が植えられた。特に、東南の一角には集中的に植えこまれ、「森」づくりが進められた。

樹木たちは少しずつ成長し、「あいあいの森」は次第に森らしく形が整っていった。市営住宅の住人たちが植え込んだ樹木も「森」の中心にあって、さらに大きく成長していった。森の中には山小屋風の大型遊具「ドリームハウス」も完成した。そして20年が経過した。

△

けれども、自然の成長力は時として人間の制御力を超えた力も持つようになる。樹木はずんずんと成長し、巨木化する。巨木化、高木化すると枝打ちなどの手入れができなくなる。風水害などで人間に被害を及ぼすこともある。「あいあいの森」はすでにその危険領域に達している。高木となった樹木の枝や幹を払う「剪定」はその危険を防ぐ作業である。

数年前、隣の晴嵐幼稚園では園庭の巨木が根元から伐採された。大型のクレーン車を園庭に入れて伐採された大木を見ると大きな空洞ができていた。もし、大型台風の襲来で樹が倒れたら、周囲の建物などに大きな被害を出すに違いない。それを防ぐための伐採であった。

「あいあいの森」は、生き物たちの「生家」

今年の夏、「あいあいの森」やその周辺の地面に、直径2センチくらいの深い穴が無数にできていた。これは、長い地中生活を終えたアブラゼミなどが地上に這い出してきた通路である。セミの幼虫は、(諸説あるが)地中で3年、あるいは7年、または13~4年もの間、生活し、地上に出てくるとわずか1週間ほどで命を終えると言われている。このわずかな地上生活の間に樹木に産卵して命を未来につなぐという。夏の間、やかましいほどに鳴き叫ぶセミは命が終わるのを前にして、自らのために挽歌をうるさく奏でているのだろうか。

樹皮の中に産卵されたセミの卵は一年後に孵化し、生まれた幼虫は地中へ潜って、長い地中生活を始める。セミの一生にとって「あいあいの森」はまさに「生家」である。

「樹木があるところに命が育つ」

セミだけではない。20年かけて樹木が成長してきた「あいあいの森」や「あいあいの園庭」は、様々な生き物が育つ宝庫となっている。

昨年6月、園庭の金木犀(きんもくせい)の樹の中で、ヒヨドリが巣を作り5羽のヒナを生んだ。そして6月26日、全部のヒナが無事に巣立っていった。(その日は、当園の保育士であった森田洋子先生が天国へ旅立たれた日であった)ヒヨドリは巣立ったきり、一羽も帰ってこないが、まさしく「あいあい」生まれのヒヨドリたちだ。

10数年前にも、「あいあい畑」の金柑(きんかん)の樹の中に、山鳩のような鳥が巣を作りヒナを育てたことがあった。「樹木があるところに命が育つ」.....そんな自然いっぱいの「あいあい」は、20歳(はたち)になったばかりである。